

環境考古学

と

古文化財科学

理科教育講座 助教授

金原 正明



白黒からカラーへ

近年、考古遺跡に対する関心も高くなり、発掘調査の現地説明会も度々開かれ、マスコミでも遺跡は盛んに取り上げられるようになった。

ところが、そこで目にする遺跡は土と石の造形であり、現在私たちが生活している環境、草や木が生い茂ったりするような様子は想像できない。これでは、白黒テレビで遺跡を見ているようである。

私の研究は、遺跡に草を生やし木を植え付け、穴ぼこの用途

や機能を調べ、時には匂いさえ漂わすことである。

土と石の造形である遺跡であるが、その堆積物には多くの情報が詰め込まれている。植物は腐り、バラバラになって花粉や種子などの状態で堆積物に残る。それを分析によって取り出し解析する。そうすると、遺跡の環境や農耕が明らかになってくる。まさに白黒からカラーへの色づけを行っていくのである。

花粉は語る

たとえば、斑鳩町の藤ノ木古墳の石棺内からは多量のベニバナ花粉が検出された。



ベニバナ花粉

ベニバナはエジプトないし中東の原産であり、花びらを染色に用いる。万葉集には末摘花としてうつろいやすい恋の色として歌われている。藤ノ木古墳では、被葬者を包む布の染色に用いられたのか、石棺内を彩る朱やベンガラとともに

死者の再生を祈って染料として使われたのか。

平城京の道路側溝の堆積物を分析すると、イネ科、カヤツリグサ科、アカザやヒユの仲間、ヨモギ属の花粉が多量に検出される。平城京が草深かったことを物語る。



ムクゲ花粉

それらの花粉に混じってムクゲの花粉が見いだされる。ムクゲは大陸原産で日本にいつの頃かにもたらされた。唐の都を模した平城京には、異国情緒あふれる植物が植えられていたようである。

汚物の臭う都

また、堆積物中には珪藻というプランクトンの遺骸が含まれる。珪藻は種類が多く、水質をよく示す。たとえば、平城京の道路側溝は塩分濃度がやや高く生活排水が流れ込んでいたとか、河内平野下部の河内湾がいつ頃まで海であ

ったかなどを物語ってくれる。

寄生虫卵の分析はより人臭く、糞便のありかとその汚染を示唆する。そのことから、解らなかった便所遺構が解明され、汚染の様子から都市化の状況なども調べるができる。藤原京や平城京はかなり臭う都であったと考えられる。便所遺構の

場合、そこから検出される花粉や種子が糞便起源とみなされることから当時の食物に直結して考えられる。

私の研究内容は環境考古学であるが、研究室では保存科学などの他の古文化財科学のテーマも学生たちと共同で行っている。

